

## 両の木神社遺跡出土の須恵器長頸瓶について

出月洋文

- 
- |               |                      |
|---------------|----------------------|
| 1 はじめに        | 4 出土長頸瓶の年代とその性格をめぐって |
| 2 両の木神社遺跡について | 5 おわりに               |
| 3 出土須恵器の觀察    |                      |
- 

### 1.はじめに

山梨県立考古博物館では、1992年2月18日から3月15日の間、「やきものの歴史」と題したたいへんささやかな企画展を開催した<sup>1)</sup>。これは当館（県埋蔵文化財センター）が収蔵する県内の出土資料の中から、残欠や小片も含めた 200点ほどにより、縄文土器に始まり近現代の陶磁器に至るまでの流れを概観しようというものであった。

その中にやはり須恵器の変遷を扱う部分がおかれたのだが、展示資料選定の段階で、壺蓋の類もさることながら、一般に見栄えがする壺の仲間にある程度比重がかかっていった。

須恵器の流れを紹介する以上、当然のこととして個々の資料の年代を明確に把握することが前提となる。これについて急ぎいくつかの参考図書や編年に関する論考などに目を通したのだが、比較的研究の豊富な壺類などはともかく、ここで取り上げようとするような器種の須恵器についてはその確かな年代観を得ようとするのに、なかなか容易ではないことが痛感された。

さて、そのようなわけで本稿で取り上げようとする両の木神社遺跡<sup>2)</sup> 出土の須恵器長頸瓶も、同様なものが県内の後期古墳から出土する須恵器群の中に散見されたりする<sup>3)</sup> ことから、当初は古墳時代後期であろうという見込みで、その一、二を展示リストにあげ、作業を始めたのだが、しばらくして再確認の意味でもう一度その帰属時期の検討を試みたところ、最終的に後述するような理解に及んだ。ここでは資料の改めての觀察とともに、その年代観やこの遺跡での在り方などをめぐって検討してみたことをまとめて提示してみたい。

なお、ここで扱う須恵器の器種名についてであるが、発掘調査報告書では「長頸壺」として報告されている<sup>4)</sup>。しかしこの種の須恵器については、むしろ“長頸壺”ないしは“長頸瓶”と呼ばれることが多い。平城宮跡出土の須恵器の器種表<sup>5)</sup> では“壺K”ないしは“壺L”に相当すると思われるが、ここではその両者にまたがる器種を一括して扱い、「壺の中でも頸部の細いもの」を“瓶”とする理解<sup>6)</sup> から、長い頸の瓶すなわち「長頸瓶」として記述を進めたい。

### 2 両の木神社遺跡について

#### (1) 遺跡の概要

両の木神社遺跡は、東八代郡一宮町末木に所在する両の木神社の周辺に広がる古代集落遺跡である。金川扇状地の扇央部で、付近の標高は 350 m 前後となっている。この遺跡の環境を見るなかで、とりわけ注意されるのが甲斐の国分二寺の所在地にたいへん近いという点である。南西700 m のところには国分僧寺跡が位置し、西方200 m 足らずで国分尼寺跡の推定寺域にさしかかるという位置関係にあり、いわゆる国分寺遺跡群の一角をなしている<sup>7)</sup>。この両の木神社遺跡は、両の木神社の境内地とその北、西、南側の隣接地を含めたごく限られた範囲であるが、東には車地蔵遺跡、南には竜ノ木遺跡、そして西側は国分尼寺遺跡と、遺跡そのものは連続して広がっている。

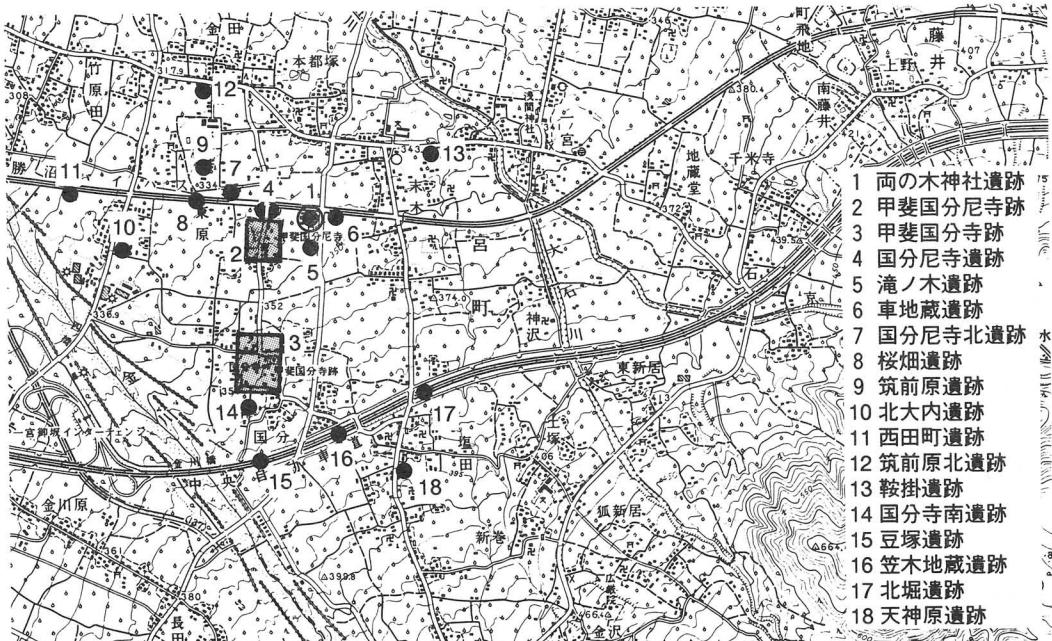
この遺跡が最初に確認されるのは『一宮町誌』<sup>8)</sup> によってであり、その第二章の「土師発見一覧表」にいわゆる国分期の遺物散布地としての報告が見られるものがそれである。以後、これまでに開発事業などにともない、遺跡の隣接地も含めて数度の発掘調査が実施されている。

その最初の発掘調査は1971年のこと、両の木神社境内の東側を広域農道が通過することになり、このときの県教育委員会による調査の結果、幅10 m ほどの道路予定地から平安時代の竪穴住居5軒が確認されている<sup>9)</sup>。

また1974年には、両の木神社の北側を、先の広域農道と直交して計画された国道20号線勝沼バイパスの建設にともない発掘調査がなされ、幅25 m 余りの道路敷内に、奈良時代住居2軒と平安時代住居14軒が同じく県教育委員会により確認されている<sup>10)</sup>。

今回の検討資料に取り上げた須恵器群を得ることになった調査は、1987年に県埋蔵文化財センターにより実施されている。すなわち灌漑事業関係の送水管埋設工事に伴う発掘調査として、幅2m ほどに神社境内の北よりの部分を横切る形で行われたものである。

さらにその後も、一宮町教育委員会によって、各種の事業に関連した調査が継続されて来て



第1図 両の木神社遺跡の位置と周辺の遺跡

1おり、本遺跡を含め、国分二寺周辺の古代集落の展開の全容が次第に明らかにされつつある。

## (2)出土状況の確認

さて、資料の理解に不可欠と思われるため、資料の検討にはいる前にもう少し、1987年の調査により明らかにされた状況の細部を確認しておきたい。

この調査で明らかにされた遺構は、遺跡内をほぼ東西に横切る形の細長い調査区の中で、両の木神社の拝殿の真北にあたる位置に確認された南北方向の溝状遺構1本だけである。溝状遺構は検出面での幅が約10m、このレベルからの深さは1.5mあまりである。また溝状遺構の底面は、幅が3mほどで、30cm内外の自然石が多く転じており、河原のような観を呈している。この底からの立ち上がりは、東側では急であり、それに比べ西側ではいくぶんならかで、中位に幅の広いテラスを有している<sup>11)</sup>。

溝状遺構にかかる遺物として報告されているのは、堆積の下部からの鉄鏃と丸瓦など、そして西側立ち上がりのテラス上に集中して見られた須恵器群が主だったので、これらのほかに9世紀代の土師器の破片資料もかなり多く見られている。

## 3.出土須恵器の観察

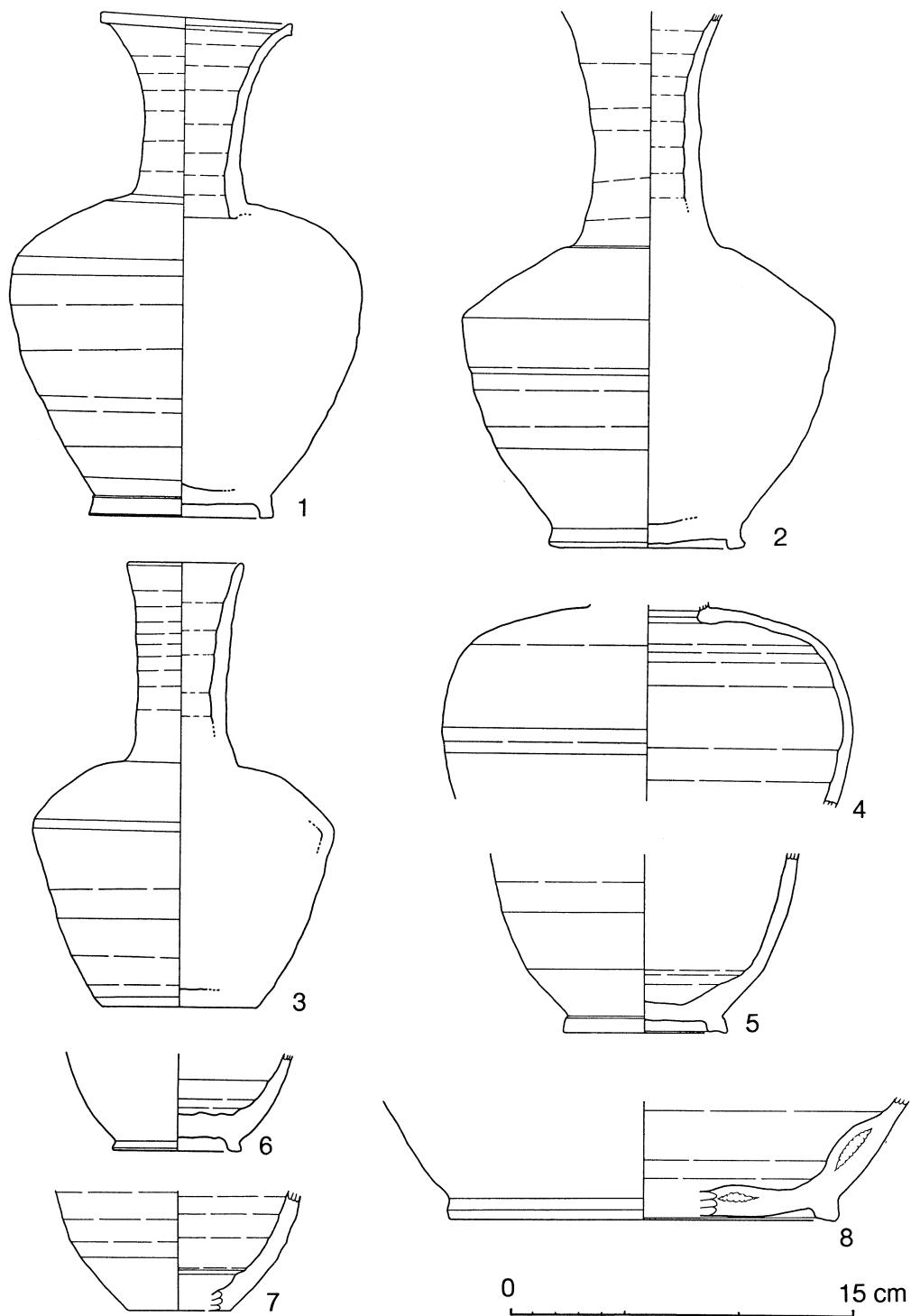
つぎに、この溝状遺構の西側テラス部から集中的に出土した須恵器群について、本稿の主題となっている長頸瓶を中心に、報告書よりも一步踏み込んで資料の観察<sup>12)</sup>を試みたい（第2図参照）。

### 資料1（報文第5図の3）

ここで出土した長頸瓶のうち、もっとも残りの良いものの一つで、全体の約85%が残存する。残存部分での器高は21.5cm。推定の口径8.4cmである。肩が丸みを帯びたイチジク形の体部（最大径は15.5cm）に、口縁がラッパ状に開く長さ7.8cm、最小径4.3cmの口頸部を接合させるが、やや傾きが見られる（この傾きのため図上復元で得られる器高は21.9cmとなる）。底部には高台を有し、その径は8.2cmと座りが良い。色調は、基本的には灰色だが、窯の中での火のまわりにより片面がいくぶん赤褐色がかっている。胎土には1~2ミリの砂粒が目立つ。外反する口縁の端部の形状は、内外面をナデにより薄くした後、ほぼ垂直方向に面を取っている。口頸部の内外面から体部の下半まで横ナデ調整が施されるが、最大径をもつ辺りから下のナデはゆるく、成形の際の積み痕かと思われる横方向の凹線が見られる。体部の最下部には2段の軽いヘラ削りがなされ、底部もヘラ削り調整した後、断面が方形の高台を付けている。

### 資料2（報文第5図の2）

残存率およそ75%で、口縁端部を欠くため、現状の器高は23.2cmを計る。器形は、上半に明瞭な稜をもち、そこを最大径(16.4cm)とする体部に、細長い口頸部（現状の長さ約10cm、最小径4.7cm）を接合したもので、色調は明るい灰色を呈し、体部の肩には部分的に自然釉が見られる。胎土は緻密だがわずかに砂粒を含み、ヘラ削りで壊れるような黒色の微粒子も若干目立つ。口頸部の内外面と体部の下から4cmほどのところまでを横ナデ調整し、その下はヘラ削りとする。



第2図 両の木神社遺跡 須恵器長頸瓶実測図

底部にも回転ヘラ削りによる調整が見られ、その径 8.8cmの付高台は比較的幅広で低めに付けられている。

#### 資料3<sup>13)</sup>

器高19.3cm、推定口径が 5.2cmで、高台をもたない。口縁があまり開かず、口縁部端のつくりが単純な筒状の口頸部と、上半にさほど鋭くない稜をもつ体部とが接合された器形を成し、体部最大径13.4cm、平底の底部径は 7.0cmとなっている。口縁部と体部上半に欠損が見られ、残存率は85%ほどである。色調は明るいやや黄褐色をおびた灰色で、緻密な胎土には小さな砂粒がごくわずかに見られるほか、黒っぽい小さな粒子が観察される。口頸部の内外面と底から4cmほどのところまでの体部外面を横ナデ調整し、体下部と底部はヘラ削りがされている。

#### 資料4（報文第5図の8）

口頸部をその接合箇所から欠いた体部上半の3片からなる資料（残存部の割合は約15%程度で、残存高は 8.5cm、体部の推定最大径は18.0cmとなっている。器形は資料1と同様なものと見られ、口頸部の剥離痕から、その接合部での径は 5.2cmほどで、体部の大きさからしても資料1より一回り大きな長頸瓶であったといえよう。肩部には暗緑色の自然釉が顕著に認められる。器肉が比較的薄く、胎土は灰白色を呈し、緻密で、わずかに砂粒が入っている。内面はロクロ調整の痕をとどめ、外面は横ナデ調整により丁寧に仕上げられている。

#### 資料5（報文第5図の5）

体部下半から底部にかけての3片からなり（残存率約15%）、残存高は 7.8cm。4分の3ほどが残る底部には高さ 5ミリの幅広の高台が付き、その外径は 7.4cmとなっている。現存の体部の器壁の立ち上がりからすると、いくらか細目の体部をもつ長頸瓶であろうと思われる。内面にはロクロ調整が見られ、体部外面は、下から4cmのところまでは横ナデがなされ、それ以下はヘラ削りされている。底部の調整については、ヘラ切りの後に軽くナデ調整がなされているようである。色調はやや黄褐色味をおびた灰色で、胎土はたいへん緻密である。

#### 資料6（報文第5図の4）

体下部から底部にかけての、本来の形の10%程度の破片である。残存高は 4.2cm、高台を有する底部の径は 5.7cmとなっている。内面はロクロ整形の痕が明瞭で、外面は横ナデ調整がなされ、普通に見られる体下部のヘラ削りは観察されない。色調にはむらがあるものの基本的には黒っぽい灰色で、胎土には1~2ミリの長石粒が混じっている。

#### 資料7（報文第5図の7）

体部下半から底部にかけての破片である（残存率約10%）。残存高は 5.2cmである。底から2.3cm辺りまでがヘラ削りされ、それより上部は横ナデ調整されている。底面も回転ヘラ削りが観察され、高台はもたない。また体下部のヘラ削りも角度がきついので底径は 5.2cmとたいへん小さくなっている。色調は暗灰色を呈している。

#### 資料8（報文第5図の6）

大きめの長頸瓶の体下部から底部にかけての破片で、本来の形の5%前後に過ぎないものである。残存の高さは 5.7cm。高台の付く底部の径は17.0cmに復元できる。体部外面は横ナデ。底部

では中心部で回転ヘラ切りが見られるが高台よりの部分ではナデ調整がなされている。色調は灰白色。緻密な胎土で少々黒色の粒子が目立つ。

以上が本稿で検討をおこなう資料のあらましだが、このほか須恵器としては、今回は長頸瓶に器種を限定して検討を行うこととしたため、ここには図示しなかったが、甕が1点（報文第5図の9）存在した。

#### 4.須恵器長頸瓶の年代とその性格をめぐって

##### (1)器形の細分

前節で見て来たように両の木神社遺跡の溝状遺構からまとまって出土した須恵器（以下、両の木例とする）には、破片を含めて8点の長頸瓶が存在した。これらについてさらに細かな分類が可能かどうか検討してみたい。もっとも前節での観察結果でも分かるとおり、残存率が7割を越えるものは3点で、しかも肝心な口縁部形態が判明するのはそのうちの2点しかなく、残りは本来の器体の2割以下でしかない資料であって、細分にどこまで有効性があるか少々心もとないが、資料を群として見ようとする立場から、若干なりとも類別を進めたい。

長頸瓶という器種について、器形や技法によって細分するのには、口縁端部の作り、台・脚の有無、肩にある稜の形状などが大まかな指標として挙げられ、さらに口頸部の長さや開き具合、頸部と体部の接合の仕方、体部の偏平率なども勘案されなければならない。しかしここでは資料の制約から、高台の有無を主として次のように類別を行う。

##### a類 高台をもつもの

8点の長頸瓶の中で、資料1・2・5・6・8に高台が見られる。資料4についても肝心な底部は欠失しているが、資料1とほぼ同様の器形をとると推定されるのでa類の中に含めておきたい。

高台は、すべて張り付けによるものと見られるが、高台の幅や高さ、断面形状において、みな微妙に異なっている。この点は、長頸瓶の変遷の中での一定の画期の幅を越えるほどのものではないと思われる。

このa類は、体部上半の形状でさらに二つに分けられる。一つは肩が緩やかなカーブをえがくもの（a類-1）で、もう一つは体部上半に強い屈曲をもつもの、別の言い方をすれば肩に稜をもつもの（a類-2）である。a類-1には資料1と資料4があり、a類-2には資料2が相当する。他のa類の資料5・6・8については体部下半のみであるため、いずれになるか分からぬが、一つの見通しとして、長頸瓶の成形技法として通用の体部下半の数段のヘラ削りが、a類-2においては明瞭に観察されるのに対し、a類-1では消極的に行われる傾向があるようと思われ、このことに妥当性が高ければ、資料5はa類-2に、資料6はa類-1に含まれることになる。また資料8は底径が17cmと大きなものであるが、こうした大型長頸瓶は一般にa類-2の器形に限られるようである。

ところで、ここでa類としたような長頸瓶の口縁には、ふつうラッパ形に開く口縁の端部を単純にまるくおさめるものと、端部をロクロ回転を利用しながら押えつけ、端部の断面が三角形のようになる装飾的な口縁端にするものとがある。とりわけ後者のような口縁端部をもつ長頸

瓶については、その部分の作りが産地や年代を考える上で重要なポイントの一つとなるが、本資料群の中では肝心な口縁端部を残すものはa類では資料1のみである。口縁直下までありながらその端部を欠失する資料2においても、どのような口縁端部をもっていたのかを理解するのは難しい。よって口縁部形態をもつての分類はあきらめざるを得ない。口頸部の長さや開き具合についても同様である。

なおこのa類について平城宮跡の須恵器に関する器種分類に当てはめて見ると、a類-1は「壺L」、a類-2は「壺K」に相当するものといえる。

#### b類 高台をもたないもの

b類に属するものには、資料3と資料7がある。b類の器形は一般に体部上半に稜を有し、口縁の作りも単純におさめるものが基本形である。資料7については体部下半のわずかな残りしかないが、恐らくこうした器形をとるものと思われる。やはり平城宮跡での器種分類に当てはめると、「壺K」で高台のないものということになろう。

#### (2)年代

ここでは検討資料の年代について再検討を試みたい。

というのは、報文では須恵器の年代について、結論的に「6世紀後半から7世紀前半」という幅が与えられているが、同時に土師器については「9世紀後半」とされ、また溝状遺構からはもともと国分寺所用のものと考えられる丸瓦が確認されているなどの事実があり、須恵器の年代の上限を6世紀後半までもって行ったとき、溝状遺構をめぐる遺物にたいへんな年代幅が出てしまう。後で述べるように遺跡の周辺事情を考え合わせながら見ても、この須恵器の年代に検討の余地があるようと思われるのである。

ところで須恵器の編年的な研究を行う場合、特にその生産地である窯場の資料が大いにものをいうが、本県でこれまでに確認されている須恵器生産にかかわる窯跡といったら、7世紀初頭の境川村下向窯跡<sup>14)</sup>、7世紀後半の境川村牛居沢窯跡<sup>15)</sup>、同じく7世紀後半の瓦陶兼業の敷島町天狗沢瓦窯跡<sup>16)</sup>などが挙げられるだけである。さらにこのうち下向窯跡については若干の採集資料が報告されているのみで、詳細については不明であるし、また後二者についてもその時期の在地窯業の実態を垣間見るには非常に重要なものではあるが、それだけで山梨における須恵器編年を組み上げるほど豊かなものではなく、とりわけここで問題とする長頸瓶の年代を検討するに足る資料にはなり得ていない<sup>17)</sup>。そこで本例のような須恵器の年代を検討するとなるとやはり陶邑窯なり、猿投古窯なり、美濃須衛窯なり、また湖西古窯なりの生産地の調査研究で確立している編年を援用して行かなければ前に進まない。

田辺昭三氏の陶邑編年<sup>18)</sup>では、長頸瓶はⅢ期に入ってから、すなわちTK-217あたりから登場てくる器種であるとされ、Ⅲ期を通して供膳用の器形として重要な位置を占めるが、次のⅣ期を迎えると消えてゆくものとされている。年代的には7世紀前半から8世紀半ば過ぎまでということになる。陶邑窯における長頸瓶は口頸部と体部のバランスがよくとれ、底部には安定のよい脚台、高台を付けているが、まったく台をもたないものもある。体部が偏球形で、ふん

ぱりの効いた長めの脚をもつものが古式に属し、Ⅲ期前半以降しだいに体部は長くなり、台は短小化していくという変遷が指摘されている。ここで検討資料のうちa類－2のような器形はMT-21あたりから見られるようである。なお、長頸瓶という器種が消えるIV期というのは陶邑窯では衰退期に当たるが、そこでは姿を消してゆく器形の須恵器も地方窯では生産が続くという。

MT-21というと陶邑Ⅲ期も後葉になり、平城京の時代に入る。そこで平城の宮跡や京跡の資料に目を転じてみると、a類－2の資料2に類似したものに平城宮Ⅱ期のSD 485出土例<sup>19)</sup>などがあり、またb類では、平城宮Ⅳ期前半の時期のSB7802出土のもの<sup>20)</sup>などが、器形的に資料3とたいへんよく似通っている。それら平城宮跡（ないし京跡）の須恵器に与えられている実年代を適応して考えることが可能なら、両の木例もおよそ730年頃から760年頃の間ということになろうか<sup>21)</sup>。

次に尾張や美濃地域の窯業遺跡での長頸瓶の出現について見ると、美濃地域がやや先行して7世紀の第4四半期とされ、尾張地域でも続いて7世紀第4四半期の後半には長頸瓶が確認されている。両地域とも7世紀代では、脚の形態が「ハ」の字形に開いたものであるが、700年をまわって程なく短めの脚、すなわち高台といえる状況に変わっていくのが確認される<sup>22)</sup>。

ここまで見たところでは長頸瓶という器種そのものに付される年代は、大まかにいって7ないし8世紀となってくるが、このような時期にもう一つ注目される窯業地に湖西古窯がある。ここではすでに、後藤健一氏を中心に比較的大規模な窯跡群の実態把握と編年モデルの確立がなされている<sup>23)</sup>。後藤氏の編年観によると湖西古窯での長頸瓶は、その機軸となるA類が6世紀末から7世紀初頭に提瓶から変容して成立した、体部を偏球形にしたいわゆるフラスコ形瓶をその初期段階として現れ、湖西古窯第Ⅲ期第3小期の前半、すなわち7世紀後葉（671～681年頃）に高台が付くようになり、定形的な長頸瓶として発展する。こうした長頸瓶A類は湖西古窯V期になると、すなわち8世紀の中頃になると消え、代わりに短めの口頸部とその口縁端部を横ナデ調整して直立させた（端部断面が三角形状になる）器形のB類が主体となる。

そこでこの両の木例の須恵器を湖西古窯編年モデルに対比させて見ると、両の木例a類－1は湖西長頸瓶B類に比定され、湖西古窯V期、8世紀後半と位置付けることができよう。a類－2については口縁端部の形状が分からぬいため、湖西長頸瓶A類の系列ないしはC類としてとらえられるが、いずれにしろ湖西古窯IV期あたり、8世紀の初頭から第2四半世紀前半頃と見ることができる。また両の木例b類は、湖西長頸瓶ではD類に当たり、湖西古窯IV期3段階、8世紀第2四半世紀の前半に位置付けられそうである。湖西古窯編年によっても両の木例の年代幅は8世紀初頭から8世紀後半にかけてということになり、先ほどの平城宮跡の資料との対比結果と矛盾しない。

このほか直接両の木例の器形と一致する資料は見いだせられないものの山梨周辺で目についた窯業地の状況を補足すると、長野県下でも近年須恵器窯の調査研究が各地で進んできているが、その一つに松本平での調査をもとにした小平和夫氏による詳細な編年研究<sup>24)</sup>がある。そこで長頸瓶は器形によりA・B・Cの3類別が行われ、それぞれに変遷が示されている。このうち長頸瓶C類はいわゆる「壺G」に相当するため、ここでは両の木例a類－1と同様な器形の長頸

瓶 A 類と、a 類 - 2 に同じ長頸瓶 B 類の在り方に注目すると、前者は 8 世紀に入って登場し、9 世紀半ばまで多く見られ、灰釉陶器長頸瓶に席を譲りながらも 10 世紀初頭まで存在している。また後者については 8 世紀の初頭から後半にかけてのものが知られるが、こちらは大方が美濃須衛窯産と見られることがある。

また関東でも多摩ニュータウン No. 342 遺跡、同 No. 513 遺跡、埼玉県鳩山窯跡群など<sup>25)</sup> の窯業遺跡で長頸瓶の生産が確認されている。年代的に見ると、No. 342 遺跡が飛鳥 I 期から平城宮 I 期段階、No. 513 遺跡が平城宮 I 期併行、鳩山窯跡群で平城宮 I 期以降にとそれ位置付けがされている。

この項での以上のような検討をまとめると、長頸瓶という器種は、フラスコ形瓶をその祖形として 6 世紀末から、一般的には 7 世紀前半から 8 世紀の初頭にかけての間に陶邑窯以下各地の窯業遺跡で生産が開始され、一部を除いて 8 世紀代を大きく出ることなく終焉を迎えるものといえる。こうした中で両の木例の年代として、およそ 8 世紀初頭から 8 世紀後半にかけての幅が適当ではないかと思われる。

### (3) 性格をめぐって

さて前項で検討した結果、これらの須恵器長頸瓶群そのものの帰属時期は、少なくとも古墳時代ではないといえ、そうなると出土遺構である溝の性格としては、報文で可能性の指摘のあった古墳の周溝というのは、たいへん考えにくくなる<sup>26)</sup>。

ちなみに遺跡周辺の後期古墳の分布状況を見ると、第 3 図に示すごとくである。もっとも距離的に近い国分築地古墳群<sup>27)</sup> でさえ、その分布域と両の木神社遺跡とは国分二寺をはさんでかなりの隔たりがある。ここに古墳を想定した場合、想定される時期の古墳としては、まったくぼつんと単独で存在したとは理解しにくく、仮に国分築地古墳群がもう少し今確認できるより広い範囲にあって、それが国分二寺の建設に伴い、建設予定地周辺の古墳が取り払われたとでも



第 3 図 甲斐国分寺周辺における古墳群分布

いわないかぎり、なかなか説明しきれない。藤原京や平城京の建設の際にはその予定範囲にかかっていた古墳がいくつか方付けられていることは、発掘調査によても確かめられているが、国分寺の造営の場合については、そうしたことはその趣旨からして、またいわゆる国分寺建立詔に示された立地条件<sup>28)</sup> からしても、かなり考え難いことではないかと思われる。これまでの国分二寺跡周辺で行われてきた発掘調査でも、ほかに古墳を取り壊したようなデータは今のところ得られていない。

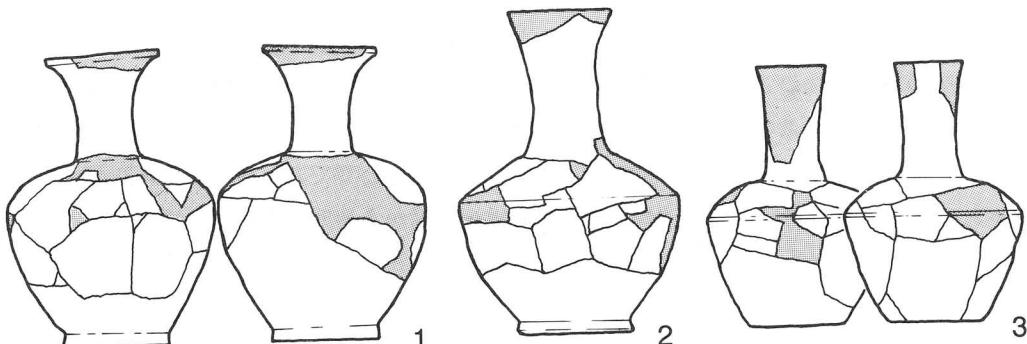
問題の溝状遺構については、これまでの須恵器長頸瓶の年代についての検討やまた遺構内に9世紀代の土師器片が見られることから、やはり古墳の周溝であるよりは、奈良時代以降の人工的な大溝というほうが妥当性が高いと思われる。

この大溝が開削された時期についてもう少し絞り込むことはできないだろうか。遺跡周辺の状況を考え合わせた場合、その時期をある程度限定して行くことはたいへん重要な問題である。これについて明確な年代をいえる手掛かりはないが、少なくとも出土遺物のうちの須恵器長頸瓶のもつ年代幅の中で、最も新しい部分、すなわち8世紀の後半には機能をしていたと考えられる。さらにいえば、大溝の規模や遺跡周辺の状況等を勘案して、恐らく国分二寺の造営開始とほぼ前後するころの開削と考えるのが適当ではないかと考えたい。溝状遺構の下層の遺物に古代の丸瓦や平瓦（おそらく国分二寺所用のもの）が混じていた点も、こうした理解になじむものといえよう。

つぎにこの大溝の西側立ち上がり面に見られたテラス部分からまとまって確認された須恵器長頸瓶群について、どのような性格付けが可能なのか検討してみたい。

まずこの問題の検討の前にいま一度資料そのものに立ち返って、その残存状況について確認しておこう。出土須恵器には、先にもふれたように8点の長頸瓶と1点の甕があった。それらはみな破片の状態で検出されている。

特に長頸瓶については、残存率が7割余りのものが3点、そして2割以下が5点となっている。残存率の高い前者はどれも10片以上の大小の破片になっており、意識的に破碎されたのではないかと考えさせられる。もともとの器体のほんの一部しか残らない後者の中にもそうしたことが



第4図 長頸瓶の割れ状態（スクリーントーン部は欠損部分を示す）

読み取れる。第4図に前者3点の割れの状況のスケッチを示した。3点に共通していえることは、①たくさんの破片になっている、ということのほかに、②口頸部と体部との接合部で割れが一周している、③口縁部の一部と体部の一部にまとまった欠損箇所が見られる、といった点も指摘できる。このような観察結果から、長頸瓶はまず口縁部の一方が強打され、それによって体部と口頸部とが離れ、さらに体部の一方に打撃が加えられ、そのようにして意識的に破碎されたと考えられるのではないかと思われる<sup>29)</sup>。この3点以外の長頸瓶の残欠も、同様にして破碎されたものの一部が、限られた調査範囲の中で検出されたものと考えたい。

だが何故に大溝の傍らに、打ち割られた長頸瓶がまとまって残されていたのだろうか。この大溝について、川のように流れた形跡は認められないと報告されている<sup>30)</sup>。発掘調査では水流についての形跡がはっきり出なかったとはいえ、これだけの大溝であれば多めの降雨などのときには当然、一時的にしろある程度の流れがあったのではないかと思われる。また流水が當時無くとも、これだけの大溝には流れという意識がもたれたこともあったのではないかと思われる。

つまり須恵器長頸瓶は、溝の（あるいは流れの）傍らで何らかの意図をもって粉々に碎かれたと推測されるのである。7世紀代の長頸瓶の在り方の分析から、長頸瓶という器種に祭祀性が指摘されている<sup>31)</sup>。そうした長頸瓶に内在する伝統をつなぎあわせて飛躍的に言えば、破碎された長頸瓶は、何らかの祭祀的な行為を物語るものかもしれない。

ここで長頸瓶という器種が、古墳以外に、祭祀的な色合いを強くもちながら出土しているという具体例を一つだけ挙げておきたい。群馬県鳥羽遺跡<sup>32)</sup>での例がそれである。この遺跡は周辺に上野国分寺跡や推定上野国府跡が近接して存在し、律令期の上野国を中心とした地域と理解されるところにある。1978年から84年にかけての関越自動車道関連の発掘調査により、奈良～平安時代を中心とする大規模な集落跡が出土し、こうした歴史性を如実に示す状況が明らかにされている。中でも遺跡のほぼ中心部に当たるH区とされたエリアから検出された、たいへん特異な掘立柱建物の遺構の存在が目を引いている。二間×二間の身舎の周囲に1辺三間の柱列が巡るほぼ正方形の平面を持つ掘立柱建物で、建物の周りに3重の溝（空堀）と1重の柵列とを巡らされている。溝のうち中ほどを巡る12号溝では、溝の底部より意識的に据えられたような状況のもとに、須恵器の短頸壺と長頸瓶が30点あまり点在し、とりわけその半数ほどを占める長頸瓶については、その頸部が「総て故意に欠き取られたような形跡が伺われ」祭祀的な色彩が強いと、報告者は指摘している。

鳥羽遺跡の場合、このような長頸瓶の在り方は、報文にもあるようにその特異な遺構の性格ともかかわっているであろう。この注目すべき建物については、一つには古代の神社そのものではないかとの推定がある<sup>33)</sup>。いまこの推定が成り立たないとしても、そこで長頸瓶の祭祀的な色彩は色うせるものではなく、遺構の時期が8世紀中葉から9世紀代という年代であることもあわせて、本稿での検討対象の長頸瓶群の性格を考えるうえでたいへん参考になるものと思われる。

また県内の比較的近い例で、長頸瓶ではなく、いわゆる「壺G」と器種を異にするが、甲府市岩窪町出土の須恵器<sup>34)</sup>が挙げられる。8世紀末のほぼ長岡京の頃と年代の近いが、やはり溝ま

たは河川と見られるところの岸辺で、意識的に破碎された状況で検出されたという。須恵器壺Gも頸長で、基本的に瓶の仲間として考えることができるもので、これもまた参考になるものといえよう。

意図的に破碎された長頸瓶について、そこに祭祀的な意味合いを見る方向でその出土例を一、二拾い挙げてきたが、これに対し、破碎された長頸瓶にもう一つのケースも知られているのを忘れてならない。最後にその点についてふれておくと、それは平城京右京八条一坊一四坪で最初に明らかにされた漆の貯蔵運搬容器としての長頸瓶における破碎の場合である<sup>35)</sup>。西市に近い一四坪の一角に検出された、奈良時代前半に当たるⅡ期の時期の土坑SK2001からは、漆の付着した土器類などが多量に出土し、それは付近に工房の存在を推定させるものであったが、特に須恵器の長頸瓶を中心とする壺類の占める割合が多く、長頸瓶などが漆の運搬容器として用いられていたことが報告されている。壺類はほとんど破片で出土し、その中には肩部付近に打撃を受けた痕跡をとどめるものがあって、その長頸瓶などの漆容器は最後に打ち割られて中身の漆が搔き出されたと理解されているものである。こうした例はその後藤原京の調査などでも確認され注目されている<sup>36)</sup>が、両の木例の長頸瓶の場合については、現状の状態を観察した範囲では、漆の付着は1点も確認されないし、その他漆に関係したと見られる遺物の伴出も見られないでの、このような漆容器としての可能性はほとんど考えなくともよいように思われる。

ここでは以上のように、検討資料の破損状況から考えられることと、若干の類似例を挙げ、両の木神社遺跡出土長頸瓶の性格について検討してみたが、その論旨を確認すると、長頸瓶は溝のかたわらで故意に打ち欠かれたものであり、その行為の背後にいま明確に把握はできないものの、ある種の祭祀性が存在したのではないかということである。

## 5.おわりに

以上、本資料に関しての再検討をとおして指摘できたことを整理すると、

- a) 検討資料は、固体ごとに形態的特徴が異なるものの、ほとんどが須恵器の長頸瓶で占められている。
- b) その年代は8世紀初頭から8世紀後半までの時期を当てることができる。
- c) したがって検討資料を出した遺構は、古墳の周溝ではなく、国分寺周辺集落の中に設けられた大溝と理解するのが妥当であろう。
- d) 検討資料に内在する歴史的性格として、長頸瓶という、ある意味で祭祀性をもつ器種で、しかも破碎された状況のもとにあることから、大溝に面して執り行われた何らかの祭祀的行為を物語るものではないかと考えられる。
- e) 大溝のひとりで長頸瓶が関係した行為が行われた年代は、問題の長頸瓶がもつ時間幅の中の最も新しい部分、すなわち8世紀後半の国分寺の造営開始後のある時期と推測される。

これまで、この小稿では検討資料の年代と、その遺跡での在り方の再検討を試みてきたわけであるが、その検討の進め方に、初めに結論ありき的な感があり、編年的裏付けや資料の性格

付けにかかわって吟味が十分尽くされたとはいえない。むしろ古代における地域社会の実像に迫る作業の糸口に、ようやくたどり着いたといえるほどのものかも知れない。今回の須恵器の検討作業は、かなり大まかなものとなってしまっている。今後の課題として、さらに他の器種も含めた8~9世紀の須恵器の編年的位置付けをより確かにしていく作業が必要であろうし、今回は生産地の特定についての試みも全くできなかったが、検討資料の観察を進めながら同じa類の中でもa類-1とa類-2とで明らかに胎土や焼成について相違が見られ供給事情の違いによるものではないかと感じられ、供給地の検討も残されている。さらに、こうした出土例が一般化しうる事象であるかどうか。またこの遺跡が甲斐の国分寺の展開と強く関連する位置関係にあることも含め、その背景社会の把握などが考えられる。これらについて機会をみて、あらためて考察を加えてみたい。

最後に、資料の再検討についてご理解いただいた調査担当者の小野正文氏、有益な助言や示唆を与えていただいた信藤祐仁、瀬田正明両氏に末尾ながら感謝の意を表したい。

## 註

- 1) 特別展や企画展は、ふつう①一定の研究成果に基づいて構成されるもの、②常設展示のある部分を補って、ないしは解説的な意味を持たせて企画されるもの、③小学生などでも十分理解でき、その領域に親しみがもてるよう意図されたもの、などいくつかの在り方があると思うが、この展示は②の位置付けで開催された。なお予算上の制約でこの内容についての図録類は刊行されていない。
- 2) 小論の主材料である須恵器は、山梨県教育委員会ほか 1989『下長崎遺跡・両の木神社遺跡』所載の両の木神社遺跡の本報告にもとづいている。
- 3) 例えば四ツ塚1・2・6号墳(山梨県教育委員会ほか 1985『四ツ塚古墳群』)、釈迦堂1号墳(山梨県教育委員会ほか 1986『釈迦堂I』)など。
- 4) 註2) 前掲報告書。なお調査当年度に公表された概報(山梨県埋蔵文化財センター 1988「両の木神社遺跡」『年報』4 p. 25)では「長頸壺」の呼称を採用している。
- 5) 奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告書IX』の別表5による。
- 6) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店 の本文 p. 14。
- 7) 一宮町教育委員会ほか 1991『金山遺跡』の p. 1。
- 8) 一宮町役場 1967『一宮町誌』の p. 217~218。
- 9) 山梨県教育委員会 1972『甲斐国国分寺周辺聚落の調査(予報)』
- 10) 山梨県教育委員会 1974『古代甲斐国の考古学調査』
- 11) 註2) 前掲報告
- 12) 再実測を行いながら観察を進めた。以下の計測値、推定値はその実測図にもとづく。
- 13) 資料3は発掘報告 註2) 前掲書の写真図版には示されているが、実測図は載せられていない。
- 14) 橋本博文 1979「甲斐における須恵器生産」『丘陵』6 甲斐丘陵考古学研究会 p. 1~4

- 15) 山梨県教育委員会 1990 『山梨県生産遺跡分布調査報告書』
- 16) 敷島町教育委員会 1990 『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』
- 17) 明確に長頸瓶といえるような器形の資料は、報告された中には見られない。
- 18) 註6) 前掲書
- 19) 奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告書VI』
- 20) 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告書IX』
- 21) 両の木例a類－1については、平城宮跡の報告書であたることができた範囲では、年代を同定できるようなものが認められなかった。
- 22) 比田井克仁 1991 「一地方窯成立の史的契機」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター p. 373～403
- 23) 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会 p. 218～381
- 24) 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4松本市内その1』 (財)長野県埋蔵文化財センター p. 97～158
- 25) 註22)前掲論文
- 26) 註2) 前掲報告では、須恵器の年代を6世紀後半から7世紀前半とする前提にたって、古墳の周溝としての理解に比重を置いていたが、調査当年度の概報(註4)前掲)では「何らかの区画」のための「大溝」との性格付けがなされており、註2)前掲の本報告でもこの理解は否定されきってはいない。
- 27) 山梨県教育委員会ほか 1975 『国分築地1号墳』など。
- 28) 『類聚三代格』卷三所収、天平十三年二月十四日勅。
- 29) ただし、どれにも打撃痕等は確認されない。
- 30) 註4)前掲概報
- 31) 註23)前掲論文 (p. 351～2) など。
- 32) 群馬県教育委員会ほか 1986 『鳥羽遺跡 G・H・I区』
- 33) 註32)前掲書で、報告者の唐沢至朗・綿貫邦男両氏は可能性の一つとして神社説をあげているが、同書の別稿の中で宮本長二郎氏は建築史の立場から考察を加え、鳥居や瑞垣を備えた神殿の復元図を提示しつつ、明確に古代の神社としての性格付けをされている。その後そうした理解にもとづいた、群馬県教育委員会 1992 『歴史を走る－関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査終了記念写真集－』も刊行されている(特にp. 50～51)。
- 34) 未報告。信藤祐仁氏のご教示による。
- 35) 奈良国立文化財研究所 1989 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』、及び巽淳一郎 1991 「都の焼物の特質とその変容」『新版古代の日本』6(近畿II) 角川書店 p. 263～283
- 36) 奈良国立文化財研究所 1988 「紀寺跡寺域東南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』18 p. 38～41